

---

# 異世界の悪魔

あいあむ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異世界の悪魔

### 【Nコード】

N1722V

### 【作者名】

あいあむ

### 【あらすじ】

神谷啓人は自分を異世界に召喚した施設を破壊し、召喚した国に敵対する国に拾われる。彼が意識を取り戻したとき、彼に異世界に  
来てからの記憶はなかった。 不定期更新です。

## プロローグ（前書き）

必要ないとは思いつつも書いてみたかったプロローグです。  
必要ないので興味なければ読み飛ばしても平気という仕様です。  
たぶん。

とりあえず最初から厨二な感じで行ってみました。

## プロローグ

ある男の話をしよう。愚かで、聡明な。そんな男の話だ。

端的に言えば、男は極めて優れていた。頭腦的にも、体力的にもそれ故に、愚かだった。自らの失敗をよしとせず、他者への依存をよしとせず。本来ならば、そんなことできるはずもないのだ。

しかし、不幸なことに男にはそれが可能だった。何故なら、男が異常なまでに優れていたからだ。結果、男は孤立する。

男が周りを顧みない　　いや、顧みる必要がないために、男の才能に憧れを抱いていた味方が消える。男はそれを気にしない。同じ理由で、男の才能をひがむ敵が増える。男はそれを気にしない。

そんな息子に親は恐怖し、別居を始める。男はそれを気にしない。

ある者は言った。彼はまるで英雄のようだ、と。

その者の言ったことは的を射ていた。確かに、男の才能は英雄と呼ぶに足るものだった。それこそ、生まれた時代を間違えたのかというほどに。

そう、男が哀れなのは時代が英雄を欲していなかったということ。必要とされない才能はただの異端であり、異常だ。

異常に対してできることは、その異常を正すことだ。それができなければ、それを見なかったことにするしかない。

だから、なのだろうか。

彼が居なくなっても、誰一人として気付かなかったのは。

## 一話 悪魔（前書き）

三人称って難しい。書ける人は本当に尊敬します。

## 一話 悪魔

「あ、ああ、あああああ！」

男は恐怖していた。ありえない、ありえない、ありえない。彼の目の前に広がるのは、さながら地獄絵図だ。神殿に立ち込めるのは、屍臭であり死臭だ。神殿、神官、司祭、神殿騎士。あんなに強かった副騎士長や、騎士長。それら全てが燃やされる。神殿の祭神に関するありとあらゆるものが、次々と燃やされていく。

この地獄絵図の中にあつてただ一つの傷もなく、黙々と同僚を燃やし続けるあの男こそが悪魔だと言うのか。ああ、確かにあの黒の瞳と黒の髪は悪魔と言うにはふさわしい。

悪魔に対しては、神殿騎士の近接攻撃だけでなく、彼ら神官の魔術までもが等しく無力であった。この悪魔の前では、ありとあらゆるものが燃え落ちる。それはやはり、神官たちの魔術をもその範疇に収めた。火・水・地・風・雷。基本とされる五属性の魔術全てが無力である。神殿騎士に限っては、悪魔に接近することすらできない。一定の範囲内に入った瞬間に須らく標的とされ、燃やされてしまうのだ。

神の前では森羅万象すべての事物が平等であると信仰する彼らにとつて、悪魔が生み出す理不尽なまでの平等さは何と皮肉なことだろう。

「燃えろ、燃えろ、燃えろ！」

悪魔が言霊を唱えるたびに、一人、また一人と同僚が燃え上がる。驚いたことにこの悪魔は、詠唱が一節しかない初級魔術だけでこの惨状を引き起こしていた。足から燃えているところを見ると、あれは相手の足元から火柱を上げているのだろう。そんなの、一節の詠

唱だけでできる範囲を超えている。

恐怖に足がすくみ、逃げることもできずにただただ立ち尽くす。たった一つできるのは、ひたすら無力に祈るだけだ。願わくは、自分の番が来ないことを。

ああ、神よ、我らが神セーラよ。何故このような残虐、このような非道をお許しになるのですか。何故、悪魔の存在をお許しになるのですか。

この場にいる神官、司祭、神殿騎士たちの総意と思える祈りに、しかし彼らの神は応えない。

その代わりとばかりに響くのは、同僚たちの断末魔と、悪魔の狂ったように笑う声。神官たちの無力を嘲笑<sup>わら</sup>っているのか、はたまた殺戮の快楽に酔っているのか。

その笑い声に、耳を犯されるような感覚。遂にと言うべきか、男は我慢が出来なくなつた。それが結果死に急ぐことになるを知つていながら、彼は恐怖を振り払うために攻撃せずにはいられなかつた。

「落雷せよ！」

雷属性の初級呪文。雷属性の特徴はその攻撃速度と、その照準の難易度だ。ややコントロールに不安が残るが、雷属性は照準すればいい相手が明確な対個人でこそ比類なき強さを発揮する。

「燃える！」

しかし悪魔は、そんなことお構いなしだった。雷属性の攻撃のための初級魔術を、火属性の同じく攻撃のための初級魔術で防ぐ。

雷を燃やす。そんな非現実的な現象が、今日の前で起こっている。同じ初級魔術でありながら存在する、圧倒的な威力の差。男は術者によって同じ階級の魔術でも大きな差が発生するとは聞いたことがあつたが自分の周りにそんなことはなかつたために、どこか自分に

は関係のないものだと思っていた。悪魔が初級魔術だけで神殿に地獄絵図を描いたときに、それを実感するべきだったのだ。

「燃える！」

男の意識に残ったのは、体に突如発生した多大な熱量だった。

その女は、執事を連れていた。女が着ているのは煌びやかな白のドレス。そのふわりとして柔らかそうな栗色の髪に、全体的に柔らかい雰囲気を与える顔立ち。それに反して、どこか芯の通った凛とした雰囲気。

対する執事はといえば、若く一見優男風の外見でありながらもいかにも執事といったようなフォーマルな黒のスーツである。中折り帽を乗せた腰まで伸ばした翡翠色の髪に隠れて、金の瞳が映える。品を損なわないような身のこなしでありながら、極限まで消された気配。周囲への威嚇の必要のないときの彼は、主の邪魔にならないようにと影のように佇む。

そんな二人がまだ完全に夜が明けきつてもいないこの路地裏にいるのは、ひたすらに場違いだ。しかし、そんなことなど関係ないとも言うように、彼女たちは歩く。女が一人だけで歩いていたというだけならば、きつと浮浪者たちに彼女は暴虐の限りを尽くされたことだろう。社会の底辺とも呼べる環境で満足に欲求も満たせない身の男たちに捕えられたうら若き女性の末路というのは、想像するに難くない。

しかし彼女たちの周りにいる浮浪者たちは彼女に襲いかかることもしなければ、獸欲を滾らせた目で彼女睨め回すような真似もしなかった。

それはひとえに、彼女の傍に執事がいるからだ。魔術も使えなければ武術の経験もない彼らは、その執事に対して本能的に危険を感じ取っていた。齒向かえば殺される。それがただ執事がそこに佇んでいるだけでわかる。

しかし、浮浪者の中に立ち上がる者が一人現れた。生命の危機を感じているからといって、女の容姿の美しさが変わるわけでもないよって、執事にその程度のこと予想できていないわけもなかった。その瞬間浮浪者たちは、ぼう、と執事の輪郭が浮かび上がるような錯覚に襲われた。

彼らが瞬いたとき、そこあった光景は変わらず佇む執事だけだった。立ち上がっている浮浪者など一人もいなかったが、そこに確かに立っていたはずの一人の浮浪者もいなくなっている。いや、それは既に人間と呼べるものではなかったというだけの話だ。頭蓋が砕かれ血の海に脳を撒き散らすだけのそれは、人間ではなくただの肉塊だ。執事の革靴の踵部分を中心に広がる赤だけが、先ほど何が起こったのかを示唆していた。

「いつもありがとうございます、クロウド」

女の声は、まるで何事もなかったかのようだった。浮浪者のうちが立ちあがったという事実も、人が一人死んだという事実も、何もかも。

「もったいなきお言葉です、姫様」

執事はそれに対して、恭しく頭を下げるだけだ。まるで日常会話でもするかのような二人に、浮浪者たちは戦慄する。彼らは震える

自分の身体を掻き抱きながら、二人が去るのをひたすらに待った。

彼女たちは再び歩き出す。ただ存在するだけで発する威圧感を撒き散らしながら、進む。進む。進む。

やがて十五分ほどたった頃だろうか。彼女たちは目的のものを見つけた。

「いましたね。クラウドはこれについてどう思いますか？」

凜とした声が路地裏に響く。

「失礼します。少々お待ち下さい」

執事はそのいたるところに手を触れ、その感触を確かめる。執事はそれを注視したまましばし思考し、やがて結論を出した。

「魔力切れ、でしょうか……。見た目通り、外傷はありません。神経がところどころ切れているようですが、回復の魔術でどうにかなる程度でしょう。魔力切れにしては軽傷と言ったところですよ」

魔力切れとはその名の通り魔力が切れることであり、神経の断裂などを引き起こすものだ。最悪の場合全ての神経が断裂し体が全く動かなくなることもあることを考えると、確かに治療できるといふことは軽傷だった。

しかしその的確な診断に、女は首を横に振る。

「いいえ、違います。それも大事なことでありますが、私が聞いているのはそれが使えるかどうか、です。使えなければ、持ち帰る必要もないでしょう？ その場合は、とんだ無駄足になってしまいますけれど」

女の判断は残酷であるが、彼女たちの目的を考えればそれは正しい判断だ。それを分かっているが故に、それに対して執事は何も言わない。彼らにとって甘さとは切り捨てるべきものでしかないのだ。

「使えるか使えないかで言えば、使えません」

執事は言い切った。女が落胆の色を見せたところで、しかし、と続ける。

「それは今はまだ、我々の求めるレベルだと、の話です。これは言うなれば原石。磨けば磨くだけ光るでしょう。それに、一般的に見れば今でも持っている力はかなり強いです。冒険者で例えるのなら、Aランクはとれるはずですよ」

その評価に、女は満足したようだった。しかし女の顔は、毅然として律されたままである。執事はそんな主を見て、微笑む。最初に使えないと言ったのは、ちょっとした悪戯だったようだ。本来執事であれば主に悪戯をするなど罰せられてもおかしくない所業だが、この二人は主従関係を持ちながら信頼関係も持っていた。この程度ならば、よくあることだった。

「はい、それでは無駄足にならずに済みましたね。それに、あちら側に先を越されなくてよかったです。あちらの戦力が増えないに越したことはありませんから。では、少しの間持っていてください」

その言葉に執事はそれを担ぎ、言霊を紡いだ。

「風よ、運びたまえ」

一陣の風が吹き、彼女たちは唐突に消えた。直前に覗き見た、執

事が担いでいたそれは黒の髪を持つ少年だった。

## 二話 危機

パチリと、神谷啓人は目を開いた。次に、自分の目を擦る。啓人には目の前に広がる光景に見覚えがなさすぎたからだ。

天井にかけられたシャンデリアがそもそもおかしかった。啓人が住んでいる部屋を照らすのはシャンデリアではなくてただの蛍光灯である。

異常を感じた啓人はベッドに横たわったまま部屋を見渡そうとして、気付いた。自分の部屋にはベッドはないということに。啓人が普段寝ているのは、一人暮らしを始めるときに家具を買わなくても済むようにと実家から持ち運んだ布団であった。

ここは既に自分の部屋ではないということに気付きながらも、部屋を見回す。そして、更に困惑することになった。自分の部屋ではないと分かっているにしても、その部屋は啓人に衝撃を与えるに十分だった。

まず、広がった。啓人の住んでいたお世辞にも広いとは言えない六畳間の部屋など比べるのもおこがましいと思ってしまうほどに。部屋にある窓もかなり大きい。

そして何よりも、豪華だった。豪華と言っても、部屋の主が富裕層の人間だということが透けて見える、自らの財力を誇示するような下品さはない。化粧台の鏡の枠などにさりげなくあしらわれた金色や、先ほどのシャンデリアなどからちらりとうかがえる程度である。しかし、それがまた部屋の主の気品をうかがわせた。

しかし、啓人に最も衝撃を与えたのはそのことではなかった。自分の黒の髪と黒の瞳が映る化粧台のその横にある本棚。そこに並んでいたのは、全て見覚えのない字に背表紙を飾られた本だ。それが示しているのはおそらく、ここは啓人の住んでいるはずの国である日本ではないということだ。確証はなかったが、その考えは不思議としつくりと来た。

何故こんなことになっているのかを思い出そうとして、啓人は頭が割れるような頭痛に襲われた。

うずくまる。目を瞑る。こめかみを抑ようとして、両の手が動かない。

そこで自分の腕を見て、思考が固まった。腕は動かないように縄で嚴重に縛られていた。足を見ると、足も同様に縛られている。

知らない部屋。知らない場所。謎の頭痛。縛られた手足。

頭痛などまるでなかったように頭痛が治まった啓人はここに至って、初めて自分の危機的状況に気付いた。幸い、動かないのは腕と足だけだ。ベッドから起き上がるうと思えば起き上がることはできるかもしれない。

啓人はなんとか助かろうと思いを走らせる。あまりの状況にアドレナリンでも大量に出ているのか。不思議と啓人の思考を困惑が鈍らせることはなかった。

叫べば助けが来るか？ 否。ここは敵地だ。叫んでも来るのは敵だけである。

暴れば手足は自由になるか？ 否。暴れば人が来る可能性がある。何故自分が生かされているのかはわからないが、敵を刺激しないに越したことはない。

警察などの助けが来る可能性はあるか？ 否。ここは日本ではない可能性が高い。ならば自分がいないことに気付いても場所を割ることは困難だろう。

脱出は可能か？ 否。否。否。

思索の末に、啓人は脱出が不可能であることを悟った。

しかし、死を覚悟するにはまだ早い。啓人は思う。自分が生かされているのには、何らかの理由があるはずだ。脱出ができないならば、糸口を見つけるまでだ。

自分が起きているのに気付かれたら面倒なことになりそうだと考えた啓人は寝たふりをしたまま糸口を探す。

不意に、カツ、カツ、カツ、という足音が啓人の耳に届いた。啓

人は一旦思考を止め、全力で息を殺した。足音が通り過ぎるのを待っている、足音が扉の前で止まった。

啓人は手のひらに汗がにじむのを感じたものの、すぐに覚悟を決めた。それとどちらが早かったか、ガチャ、という音とともに扉が開く。

啓人は、入ってきたのはどんな人間かと薄目を開けて確認した。その容貌の異常さに、啓人は目を見開きそうになるのを必死でこらえた。

視界に入ったのは、フォーマルな黒のスーツと、中折り帽の乗った翡翠色の長髪だ。物静かな雰囲気と漂わせる男の金の瞳が一瞬、猛な肉食獣のそれに変わった気がして、目を逸らしそうになる。

薄目でも開けなければよかったと後悔した。この男は只者ではない。それを、啓人は男の身のこなしから判断していた。

男は啓人が目覚めていることに気付いているのかいないのか、ベッドに横たわる啓人に近づいてきて、ベッドの傍らに置いてある椅子に座った。そして啓人をしばらく無言で見詰めた後、おもむろに脚の拘束を解いていく。

すると足を結んでいた縄がほどかれていく。啓人はここで、どうするべきか悩んだ。この流れで行くとおそらく腕の拘束も解かれるのだろう。しかし、その真意がわからない。わからないまま足を結んでいた縄がほどかれ、腕に移った。

縄をほどき終えると、男は啓人に背を向けて立ち上がった。そして、扉へと歩き出す。

啓人が狙ったのはその瞬間だった。この男は今倒してしまわなければ、脱出するときに必ず障害となる。それは明白だ。だからこそ、自分に隙を見せた今が好機だと思ったのだ。

しかし、しかし、だ。

啓人の考えは浅はかだった。何故わざわざ男が自分の拘束を解いたのか。時間はなかったとはいえ、それを考えるべきだったのだ。

それに気付かない啓人は、男の意識を一撃で刈り取ろうと脳天め

がけて貫手を放つ。手加減だとか、容赦だとかいう言葉は啓人の頭には一切なかった。いくら武術の心得があるとはいえ、それがあまりにも異常であることに啓人は気付いているのだろうか。

渾身の一撃。啓人の放った技は、一撃で決めるためのものである。男は、後ろを振り向くこともせず、その貫手を横から掴んで見せた。その瞬間啓人を覆った感情は、絶望に近かった。

「六十点です」

微笑とともに下される採点。試されている。半ば直感したが、そんなことを気にしている場合ではなかった。金の瞳と目があつて、鳥肌が立った。啓人は心に湧いた恐怖を見なかつたことにして攻撃を続ける。自分の感情を完全な絶望に代えないために。

首筋をめがけた回し蹴り。これもまたあつけなく止められた。しかし今回は必殺の覚悟で放たれた先ほどの貫手とは違い、止められることは織り込み済みだ。首にたどり着く直前でとめられた足を支軸に、流れるような動作で体を更に回す。啓人の身体が浮いた。その勢いのままもう片方の足を先ほどとは逆側にある肩へと踵を振り下ろした。

狙ったのは人体の中で最も折れやすいとも言われる鎖骨である。このままでは絶対に勝てないとわかっている男を相手取るのに、まずは人体に損傷を与えていこうというのだ。

「諦めない姿勢。それは満点ですが、先ほどから考えが浅いですよ」

踵が男の肩に届く前に、浮いている上体が動くのを感じた。男が掴んでいる啓人の右足。男はそれを片手でがっしりと掴み、振り返るようにして自分の背後の床へと叩きつけて見せた。

片手で体を振りまわされるとは考えていなかった啓人は受け身を取ることにもままならない。

「がつ！」

床へと叩きつけられた啓人は息が詰まった。ほぼ反射的に自分の身体を確認する。骨は折れてないか。何か異常はないか。幸い、どこも損傷を受けた様子はなかった。

しかし、確認したのがいけなかったのか。あおむけに倒れている啓人の頭へと、掌底が飛んでくるのを啓人はみた。気付いたときにはもう遅い。天井を向いて倒れて視界が悪くなった啓人の視界に入ったという事は、その攻撃は既に眼前に迫っているという事である。

啓人は掌底をまともに受け、自分の命の危険を感じながらも意識を手放した。

## 二話 危機（後書き）

戦闘描写が下手……

誤字報告・感想まっています。  
感想は私の気力に直結します！

### 三話 説明（前書き）

世界観の説明むづい……  
テスト勉強より集中しなきゃできませんでした

### 三話 説明

啓人は再び同じ部屋で目を覚ました。そのことを、啓人はあまりにも冷静に受け止めていた。そんな自分が空恐ろしく感じられて、呟いた。

「……異常だな」

「異常。それは、何がですか？」

聞いている者などいないと思っていた呟きにやけにもったいぶった口調で反応したのは、先ほど啓人をあっさりと倒して見せた男だった。声のしたほうに目をやると、どこか気品の感じられる女が、ベッドの隣に置かれた椅子に静かに座っていた。着ているのは、豪華なドレス。啓人はアニメなどは見ない人間だったが、啓人の頭にはどこかファンタジーな世界が思い浮かんだ。

いたのか、と啓人は苦々しく呟いて男の問いに答える。拘束を解かれているままなのは気付いていたが、啓人の戦意は既に喪失していた。ここでやりあってもまた至極簡単にのされるのは明白だったし、もうどうにでもなれと自棄になっていると言っても過言ではない。

「俺が、だ。もう死ぬかも知れないっていうのに取り乱しもしないのはどう考えてもおかしいだろう？」

そう話しているうちに、啓人はまだ異常なことがあることに気付いた。

「それに、この状況もだ。そもそも命の危険があるっていうこと自体俺の周りじゃ異常だし、俺があんとまともに……まともにつっ

ても一方的だったけど、戦闘したこと自体が異常なんだ。俺は確実にあんたの命を取りにいった。考えれば考えるほど異常じゃないことを見つけることのほうが難しいな」

啓人の言葉を聞きながら、二人はあまりの好感触に表情には出さずにはくそ笑んでいた。これは思っていた以上の拾い物かもしれない。啓人が異常であればあるほど、そしてそれを認識していればいるほど、二人には都合がよかったのだ。

「……そうですか。甘い世界で育ってきたのですね」

心中の歡喜を隠しながら、女は意図してやや厳しい言葉を吐きかけた。

無論、啓人を試すためである。この二人は、何度でも啓人を試す。自分たちの目的を遂行するために、啓人が即戦力とはなり得ないにしても、彼がどれほどのものなのかをより精密に知るためである。

「……甘い、ねえ。俺にはその感覚は分からないな。なにせ、あんなの言うところの甘い世界しか知らない」

そう言いながらも、啓人は戸惑いを禁じえない。今、女は世界と言った。しかも、啓人の住んでいた場所を知らないような口振りである。それでは、どのように自分をここまで連れてきた……？

啓人の言葉を受けた女はゆっくりと頷き、男に目配せをした。合格です。そういうかのような視線が返ってくる。女はもう一度頷いた。

「あなたに何が起こっているのか、知りたくないですか？」

啓人は即座に首肯した。尋ねたもののどう説明したものかと頭を

悩ませていると、代わって男が前に出て説明を始めた。

「まずは、根本的な説明をしましょうか。ここを信じてもらえないことには、どうしようもないという部分なのですが」

信じる、という部分に啓人は首をかしげた。今でさえ信じられない状況にいるのだ。それを置いて、なにかあるのだろうか。

しかし、そんな疑問ですら大破するような爆弾が投げ込まれた。

「ここはあなたのいた世界とはまるつきり違う世界です。ちなみにこの場合の世界というのは、抽象的な個人個人の見ているものという意味ではなく、そのまま様々な国の集合体という意味なのですが……説明が分かり辛いですね。そうですね、あなたの知っている国の名前を一つ挙げてもらえると助かります」

大体落ちが読めてきた啓人は、問われるままに母国の名を挙げた。

「日本」

落ち着き払った黒服から返ってきたのは果たして、予想通りの返答だ。

「大体予想はできてるとは思いますが、そんな国はありません。私の言う世界とはそういうことです。そもそも、この世界に国は四つしかありません。ちなみにここは、ラディン王国という国です」

やはり、ここが異世界だともいうのか。しかし啓人は、それを嘘だと一蹴することをしなかった。嘘だと一蹴するにしても、自分は囚われの身である。何を言っても無意味だということは十分に分かっていたので、啓人はとりあえず信じてみる道を選んだ。

何を言えばいいのか分からない啓人を横目に、男は話を続けた。

「反論がないようなので続けますが、実は信じてもらいたいことがもう一つ」

信じてもらいたいという言葉は、男たちに圧倒的優位に立たれている啓人からしてみれば信じろという脅迫と同じだ。圧倒的優位を盾にした要求に、呑まないという選択肢はそもそもが存在しないに等しい。

「この世界には魔術というものがあります。それは自分の心、つまり精神力を糧として使うものです」

なんとというファンタジー。啓人の感想はそれに尽きた。しかし、この男がそうと言うからにはそれは正しいのだろう。疑問はあったが、それを言っても実在するというのだから仕方ないということを啓人は分かっていた。故に、首を傾げながらも啓人は沈黙を貫く。

「魔術を用いるのに通常、言霊というものが使われます。それは例えば……そうですね、少し実演してみましようか」

そう言つて、黒服は部屋の全ての窓を閉めていった。女がそれに口を挟んだのは、男が丁度部屋の扉まで閉め終わり、完全な密室になった時だった。

「クラウド。そこから先は私がやりましょう」

「了解しました。確かに、ここからは姫様が適任でしょう」

クラウドという名前らしい男が女のことを姫様と呼んだのが啓人は気にかかったが、その疑問は黒服に目で制された。

女はそんな二人を気にした様子もなかった。

「では、とりあえず実演しますので見ていてください」

そう言つて女は次第に目を細め、やがて眼を閉じた。知らずのうちに、啓人は女の拳動に注目していた。

まだ、女は動かないのか。実際には一秒にも満たない時間が、その時の啓人には果てしなく長く感じられた。そして、啓人が瞬きをして目を開けたその瞬間。

「疾走れ」

たった三音が、部屋の中の空気という空気を震わせた。その声は、まるで啓人の頭に直接響いたように感じられた。啓人がその声に特殊なものを感じたのは、それだけではなかった。

ガタガタと、閉じられた窓が鳴る。パラパラと、化粧台の上に無造作に置かれた本がめくられていく。風を、確かに感じるのだ。風が、吹き荒れている。四方から吹く風に、啓人はうつつとしいといった様子で頭をふった。閉鎖されているはずのこの環境で、何故か。その亜麻色の髪をたなびかせながら部屋の中央で微笑をたたえて自分を見ている女に、強い畏怖を感じた。この怪奇な現象が起きたのは、この女の声が響いてから。つまり、この女の一言が密室に風を起こしたのだということが、分かってしまったのだ。

「これが魔術、か……」

「ええ。そして先ほど私が発したのが言霊です」

啓人の半ば確信を伴った呟きに、女が補足した。次いで、女が説明を再開する。

「まず説明すべきは、言霊ことたまでしょうか。言ことの霊たまと書くこれは、その通り言葉に宿るとされている霊的な力のことです」

女の説明に、啓人は頷いた。啓人も言霊という言葉には聞きおぼえがあり、聞きかじった程度の知識でもそれぐらいは分かった。

そんな啓人を一瞥して、女は言葉を続けた。

「そして、霊的な力とはだれしも持っているものですが、それはだれしも持っていないもの。一般に精神力と言われるものです」

その説明に、啓人は眉を寄せた。わかるようで、わからない。そんなもどかしさが啓人の頭を埋めていた。

気にせず、女は啓人に理解できるように言葉を紡ぐ。この作業は女にとつて難しいことであつた。何故なら、啓人が理解に苦しんでいるのはこの世界の住人にとっては感覚的に理解できる程度のものでしかないからだ。世界が違えば、こんな当然のことも通じない。そのことを、初めて実感した気がした。

「精神力とはすなわち、心の強さです。更に心の強さとはすなわち、感情の大きさ。つまりより大きな感情が乗せられた言葉が初めて言霊となるのです」

適切な言葉が見つからない。そんな表情でなされた説明に、啓人はなにかを掴んだような表情をした。親指で眉間にふれながら、啓人は思考しつづ言葉を発した。

「つまり……それは、大きな感情に生命力が宿っているからと、そういうことか？」

黒服と女が、そんな説明の仕方があつたかと深く頷いた。それに

促されるように、啓人が推論を続ける。

「つまり、言霊に生命力が宿っているから、その言霊の生命力を交換して先ほどのように風を起こすのが魔術だと？ いや、言葉に力が宿るといふのだから単にそれだけじゃないのか……。言霊の生命力を変換して……他にもなにかできると？」

啓人が興奮を隠そうともせず二人に問う。二人は満足げに首肯して、女が質問に答えた。

「ええ。水を発生させたり、火をおこしたり、電気をおこしたり。およそ生命に関することならばなんでも。一つだけ、できないこともありますけど」

「一つだけ？ 何ができないんだ？」

「それは、人体に直接危害を加えることです。死ね、といったところで相手は死にません。考えてみれば、自分から削り出した僅かな生命力で生命力の塊である人体に干渉することができないのは当然なんですけれど」

笑いながら、女は言った。自分の疑問が解消されて満足したのか、啓人は我に返った。しかし、ここまでの会話でこの二人が自分が二人の期待を裏切るようなことをしなければ害意を持たれるようなことはないだろうとあたりをつけていたので、そこまでうるたえることとはなく聞いた。

「で、俺のことをこんな愉快的な世界に招いてくれたのはあんたたちか？」

「いいえ。貴方をこの世界に召喚したのはガラム帝国。敵国です」

思わぬ否定に驚いたものの、啓人は質問を重ねた。

「じゃあ、あんた達は誰だ？」

その質問に答えようとする女を制して、黒服が前に出た。

「私は、クロウド。ただの執事です」

それを聞いて、啓人はこの男の恰好に納得がいった。この黒服が執事服と呼ばれるものなのだろう。逆に、クロウドの言ったただの執事に負けたことに驚きもしたが。

「……クロウド。名前はそれだけか？」

「ええ」

不躰ともいえる啓人の質問に、クロウドは気を悪くした様子もなく首肯する。啓人はクロウドと握手を交わして、女の方に目をやった。

「……で、あんたは？」

軽い気持ちで聞いた質問に返ってきた答えに、啓人は目を見開いた。

「ラディン王国王女。ミラ・パトリシアです」

## 三話 説明（後書き）

感想・評価はお気軽にどうぞー

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1722v/>

---

異世界の悪魔

2011年8月31日05時26分発行